花筏

森岡　正作

産卵に水脈の逆立つ花うぐひ

只中にゐて沈丁を誰も言はず

花筏母は童女に還りけり

狼煙台ありし頂桜濃し

菜の花に溺れゐる子を置き去りに

廃屋になりゆく家に猫の妻

鍬の柄に頬杖しばし春惜しむ

花溶かす

朝、薄暗い縁側の雨戸を一枚開けた瞬間、眼を射るような陽光と新緑の草木の匂いが飛び込んで来た。まさに世界が一変したようなこの世の明るさに、今更ながら圧倒的な太陽の威光を感じるばかりである。

　昨日は一日中雨であった。しとしとと降り続ける春の雨は、気が休まるようでいてなかなか落ち着かない。登四郎先生に〈**花溶かす雨やひねもす玻璃越しに**〉という句がある。昼前に各家を回る農協関係の人が来たので、「雨の中ご苦労様」と声を掛けると、「雨でないと農家の人は居ませんので」という応え、またパソコンを覗いたら「土には良い雨ですね」とあった。そうだ、我が家は農家なのだ。先生の「花溶かす雨」は美的な感覚であるが、少しばかりの自覚を持ったがゆえに、それ以後の私は雨音が変わる度に玻璃越しの様子が気になった。

　真新しい空気に誘われて裏の畑に行ってみると、確かに雨を含んだ土が艶々しい。今日は軽トラで肥料、そして玉蜀黍や枝豆の種、西瓜や南瓜の苗を買いに行こうと思う。